

# チャールズ・ラム—人間的、文学的独り立ちの過程

吉 田 泰 彦

「僕には亡くなった人々とは彼らの本の中で、きみとは手紙で話しをするしか手立てがない。」

（“I can only converse with you by letter and with the dead in their books.”）  
—チャールズ・ラム [ コールリッジ宛書簡（1796年12月10日付） ]

はじめに

Winifred F. Courtney は彼女の *Young Charles Lamb 1775-1802* においてラムのエッセイストとしての成功に関して、姉メアリーの母親刺殺事件に端を発する緊張の経験が寄与したであろうかという問いを投げかける。

メアリー・ラムが狂気の発作で1796年に母を心臓まで刺し貫くことがなかったならば、彼女の弟チャールズは1820年代のロンドン・マガジン誌において彼のエリアエッセイであれほどの成功を収めることになっただろうか？悲劇の緊張は英文学の中で彼が永続的な地位を占めるのになくではならなかったであろうか？

Had Mary Lamb not stabbed their mother to the heart in 1796 in a fit of madness, would her brother Charles have reaped so much success with his 'Elia' essays in the *London Magazine* of the 1820s? Was the tension of tragedy required to make him an enduring figure in English literature? (xvi).<sup>1</sup>

私の立場は、この件に加えて、コールリッジとの別れがラムの人間的、文学的成長を大きく促したとみる立場である。本論考はチャールズ・ラムの独り立ちの過程を余り分析に傾かず、主として彼の書簡に語ってもらうという形をとる予定である。以下に示した1796年から1800年までのラムの書簡の「名宛人リスト」により明らかなように、かなり特徴的な交際のあり方、すなわち、一定期間を限定された少数の友人と濃い付き合いをしていることが見て取れる。

ラム書簡 1796年-1800年名宛人リスト（現存する書簡は1796年から開始。）<sup>2</sup>  
96-97年（全31通）はすべてが S. T. Coleridge 宛。

98-99年（全17通）は大半が R. Southey 宛、コールリッジ宛が2通、T. Manning 宛が

2 通登場.

1800 年 (全 32 通) はほとんどがマニングとコールリッジ宛, さらに W. Godwin 宛が新たに登場.

また, ラムの文学的出発点を短詩とすれば, 最終的な到達点はエッセイであり, 彼のエッセイに近接するのは彼の書簡であることはいろいろな研究者から指摘されていて, 親しい友人に宛てた数多くの手紙は彼のエッセイ作品を思わせるものが含まれている. とはいえ, 私の見るところ, 本格的にエッセイに近接するのはようやく 1800 年 8 月に入ってからであり, 名宛人はすべて当時ケンブリッジの数学研究者であったトマス・マニングひとりである. 同一人宛の書簡に約 20 年後に完成するラムエッセイの原型が, ほとんど連続して書かれた 7 本もの書簡すべてに現れるということは驚くべき事実であり, 当然のことながら偶然と片付けることはできないが, 本稿の範囲を超えているので今後の研究課題としたい. 今回扱うのは主として, 1796 年から 98 年の 3 年間, 名宛人がコールリッジからサウジーに変わるところまでとする. さらに, 書簡の内容, 調子は相手によって変化するかという疑問に対しては, 少なくとも 1800 年まで (ラム 21 歳から 25 歳, 5 年間の記録) を調べた限り, 同一人に対する手紙はかなり統一性が認められる一方, 相手が変われば内容も態度も調子も変化することは事実である. 書簡が個人的な通信であることを考慮すれば, 自然な成り行きとみるべきだろう. 「おおそマニングの人格という刺激を受けて」 (Largely under the stimulus of Manning's personality) ラムの手紙の性質に変化が生じたとみる E. V. Lucas は, マニングとの付き合いが始まった時期のラムの置かれた状況と, 彼との交際の影響, そしてラムの文学的本領発揮の微妙な関係について次のように, 巧みに要約する.

さらに, マニングに触発された 1800 年の書簡は, 二重の意味で, 後年のどの年と比べてもより興味深い. 第一に本質的な価値をもつ, 第二にわれわれが知る最良のラム一すなわち, 洞察に満ち, ユーモアがあり, 独立心をもち, 遊び心と真剣さ, 地口と知恵のバランスの取れた真正のラム一の始まりの時期を画するからである. 悲劇は 3 年前のこ

ととなり、彼の人生で最も悲惨な時期は過ぎていた。しばしば元の健康を取り戻すこともあった彼の姉は彼と生活を共にしていた。マニングの即応の、共感的な笑い声がいつも後ろで響いていた。

The Manning-inspired correspondence of 1800 is, moreover, of greater interest than that of any one later year, both intrinsically and because it marks the beginnings of Lamb as we know him best—the authentic Lamb, shrewd, humorous, independent, balanced between fun and seriousness, puns and wisdom. The saddest part of his life was over; the tragedy was three years behind him; his sister, often in good health, was restored to him; Manning's ready, sympathetic laugh was always in the background; (1, 176)<sup>3</sup>

そして、コールリッジ依存症ともいえるほどであったラムが、上でルーカスも「独立心を持ち」という言葉で触れているように、1800年頃のラムの手紙からは他人に寄りかかっている気配は微塵も感じさせることはなく、完全に独り立ちしている様子がマニング宛の手紙からは読み取れることは注目に値する。

### 1. 1796-97年頃、ラムが友人にもたれかかっていた時期

若年のラム、すなわち、21-22歳の頃のラムに関しては、コールリッジという人物をめぐる人間関係と文学の創作・批評の平面がいわば表裏一体となっている感が強く、これら二つの面を切り離すことはほぼ不可能というべきであろう。この時期のラムとコールリッジの関係については友人関係の点から、また、文学的大望の点からみても一種の師弟関係という一面が認められる。おそらく、二人の関係を緊密にし、あるいは反発させたのも彼らの究極的な関心事は一つ、文学的達成であり、二人がそれを共有していたからであることは疑いない。またこの時期、コールリッジが優者、ラムが劣者であったことも否定しがたい事実であろう。3歳違いであるが、クライスツホスピタル時代からコールリッジは早熟の天才として有名であった一方、ラムは弁舌さわやかからはほど遠く、コールリッジのように他人を圧倒したり、惹き寄せたりする人物でもなかった。クライスツ卒業後、大学進学を果たせずに、会社勤務の傍ら文学活動を続けていたラムにとって、職場で文学に関心を持つ人がいないことは大きな痛手であったから、コールリッジとの交友が彼にとっていかに大きな意味を

もっていたかは察するに余りある。

96年から97年にかけてのコールリッジ宛の書簡において、ラムの人間的依存度を感じ取れる記述例は枚挙に暇がないが、中でもラムの親友を求める渴望の激しさは、Cowleyの哀歌を引き合いに出した次の一節から明らかに読み取ることができるであろう。

カウリーの友人ハーヴィーの死についての見事な弔詩から「僕たち二人」という言い回しを思いついた。

知らない木が一本でもあったらどうか

僕たち二人の間の愛を？—

Cowley's exquisite Elegy on the death of his friend Harvey suggested the phrase of "we two"

"Was there a tree that did not know

The love betwixt us two? —"

(Letter 2; To S. T. Coleridge)

注意すべきは、上の一文が述べられている脈絡である。ラムは自作ソネットで使用したたかが「僕たち二人は」云々という表現の借用元を記しているというだけで、うかうかすると読み流すところであるが、カウリーの原作全体に目を通すならば、これがラムとコールリッジの人間関係を予表する型を示していることに気づくのである。この詩は徳に優れ、学問に優れた親友の喪失を悲嘆する、激情の迸る調子を特徴とし、以下の一種恨みがましい一節から伺えるように亡くなった友の自分に対する愛情の不足を語る内容を含んでいる。

君の魂と肉体は、死の苦しみに

君の高貴な心が包囲された時、

我が親友よ、私が君との別れを惜しむほどには

惜しまずに別れていった。

Thy soul and body, when death's agony

Besieged around thy noble heart,

Did not with more reluctance part

Than I, my dearest Friend, do part from thee.<sup>4</sup>

もちろん、ラムがここまでのことをコールリッジに当てつけているという意味ではない。ただ、自分とコールリッジの關係にカウリーとその友人の關係とパラレルなものを感じていたにちがいないことは、その他の多数の手紙から容易に推測できる。友人がロンドンからブリストルに居を移して以来、直接的な交流の道が閉ざされたコールリッジに対するラムの感情的な訴えはこの時期の書簡には特に珍しいものではなく、半月後に書かれた手紙の次の一節はその典型的な一例といえる。

コールリッジ、きみはこの地上で（住む土地は離れていても）友と呼べる人をもつ私の至福を知らないだろう。

Coleridge, you know not my supreme happiness at having one on earth (though counties separate us) whom I can call a friend.

これに続いてラムは、失われた友情を歌う別の詩にコールリッジの注意を向けさせて、「きみはローガンの愛情のこもった詩行を覚えているかい」(Remember you those tender lines of Logan?) と尋ねる—

“Our broken friendships we deplore,  
And loves of youth that are no more;  
壊れた友情をわたしたちは嘆く、  
若い時代の愛をなくしたことを。

極めつけは、ブリストルに住むコールリッジを訪ねていける可能性が高まったことを告げた後、独身時代を懐かしんで次のように記す—

一晩だけの話だが、僕はきみが結婚していなければいいのにと半ば思う（奥さんにはこのところは見せるなよ）、そうしたら、パブの煙っぽい小部屋でいっしょにタバコを吸ってエッグホットが楽しめるのだが。だって、きちんとした部屋ですっかり幸福そうにしているきみを好きになれるかわからないから。

I shall half wish you unmarried (don't show this to Mrs. C.) for one evening only, to have the pleasure of smoking with you, and drinking egg-hot in some little smoky room in a pot-house, for I know not yet how I shall like you in a decent room, and looking quite happy. (Letter 4; To S. T. Coleridge)

成績の点からも当人の性向からもおそらく大学での研鑽の生活を望んでいたに

違わないラムは16歳で学校を出て、就職して以来文学とは縁遠い環境に置かれた上に、初期ソネットで歌われることになる恋人との別れも経験しているのだから、己の優れた資質を発揮している友人にこのように心が傾くのも十分に理解できることである。とはいうものの、文学批評に関してはラムは揺らぐことのない一家言をもち、人間的依存とは裏腹に、コールリッジを相手に場合によっては対等以上に議論を展開していることは忘れるべきではない。

## 2.『様々な主題についての詩集』、『詩集』第2版の周辺

ラムの文学的出発点といえば、1796年に出版されたコールリッジ名義の『様々な主題についての詩集』が挙げられる。96年『詩集』出版前後のラムのコールリッジとの文学的關係は、創作の点ではコールリッジはすでに「アイオロスの琴」、「宗教的瞑想」などロマン主義文学の傑作と呼ばれることになる作品を同詩集に載せているのに対して、ラムについては4点のソネットのうちピリッとした佳作といえば1点のみの状況であるから、友人を「大詩人」(master poet) (Letters 7, 22)と呼ぶのも頷けることである。ただ、詩の批評に関する限り、コールリッジの文体が<ふくらまし>に傾く癖のあること、文飾に凝りすぎることにについては再三注意して、シンプルな書き方を勧めている。コールリッジも自己弁護をしつつも、ラムの批評に理があることを認めている。また、この時期のラムの批評文のうち、コールリッジ作品の価値を極度に高く評価するいくつかの記述もラムの批評眼の確かさを証している。これを別として、コールリッジとの文学批評に関するやり取りで最も印象的な文章は96年『詩集』出版直後の6月8日から10日にかけて書かれた手紙に記された、コールリッジによるラム作品に対する改作への抗議の一文である。拙論「チャールズ・ラムの初期文学」で触れた一節であるが、単なる自己擁護を超えたロマン主義文学観につながる見解が窺えるという点、さらには、この一文自体がラムエッセイ独特の語り口を感じさせるという点で、ラム批評のエッセンスを体現した言説といってよいであろう。<sup>5</sup>ここにおいてラムは、自己の経験、自己の感情に忠実であることを文飾より優先する態度がラムの詩の原理であることを幾つかの角度から繰り返して、説得を試みている。そして、翌年の第2版で

は改作部分がほぼ原作の表現に復している事実から、おおよそ説得は功を奏したらしいことが推測できる。次に、ラムの人的・文学的成長に大きな影響を与えた母親刺殺事件に移ることとする。

### 3. メアリーによる刺殺事件直後

96年9月27日付の、メアリーによる刺殺事件を告げる手紙においては、当然といえば当然のことながら、結婚した友人を取り戻そうとするかのような子供っぽい甘えた調子は消え果てて、冷静でむしろ実務的と評すべき調子が支配的となっている。

親愛なる友人—今頃は [James] White か他の友達か、あるいは新聞から、我が家に降りかかった恐ろしい事件のことを聞いているかもしれない。僕からはあらましのみをきみに伝えたい。僕の愛する姉が狂気の発作から自分の母を死なすことになってしまったのだ。僕は折よく間に合って姉からナイフを取り上げた。姉は現在狂人保護施設に入っているのだが、おそらく、病院に移されるのではないかと僕は心配している。僕が正気を保っているのは神の恵みだ・・・だが、有難いことに、僕は至極冷静で落ち着いているし、今後色々しなければならぬことをきちんとやりおおせると思う。書いてくれないか—できる限り篤信の手紙を。

My dearest friend — White or some of my friends or the public papers by this time may have informed you of the terrible calamities that have fallen on our family. I will only give you the outlines. My poor dear dearest sister in a fit of insanity has been the death of her own mother. I was at hand only time enough to snatch the knife out of her grasp. She is at present in a mad house, from whence I fear she must be moved to an hospital. God has preserved to me my senses...but thank God I am very calm and composed, and able to do the best that remains to do. Write,—as religious a letter as possible. (Letter 8; To S. T. Coleridge)

事件後約一週間を経過して、急場をしのいだ時点で書かれたにコールリッジ宛の手紙 (Letter 10) にはラム一家の近況が丁寧に記されている。ただし、内容的にも、文体的にも通常のラムエッセイにみられる余裕のある態度はみられず、緊張した雰囲気包まれた沈着さが感じられる。とはいえ、尋常ではない大惨事に巻き込まれた当事者の事件直後の記述であることを考えると、姉弟の

現状を記す洞察に満ちた心理分析に始まり、それとバランスを取るべく列挙された一家に関わる実際的な事柄—友人たちの訪問、同居する叔母の転居、今後の家庭経済の見通し、メアリーの行く末等々—の行き届いた叙述ぶりは、文学的圧縮と選択こそ行使されていないものの、後年のラムエッセイの原型とっていいと思われる。そして、すべての記述の焦点は心配する親友コールリッジの不安の解消であり、このような状況でこのようにきっぱりとした目的意識に貫かれた手紙には気品さえ漂うようであり、直前の手紙にみられる柔弱さの影響すら感じ取ることにはできない。結果から判断すると、ラムは悲劇を通して大きな成長を遂げたとみるべきであろう。さらに、以下の引用文においては、現況報告に加えて、ふたりの平静さが不理解や不感症から生ずるものではない旨の説明がなされている。すなわち、自分たちの心理状態が並々ならぬものであることを理解した上で、世間的誤解を防ごうという注意深い配慮がみられる。自分たちふたりに独自の感覚を認識しつつも、世間的感覚との比較考量を図るといふ姿勢はラムの特徴的なパターンとなる。

僕は彼女が今朝は落ち着いていて、冷静であることに気づいた。不埒にも事を忘れ果てて冷静であるというのではさらさらない。彼女は起こったことにまことに心優しい気遣いを示しているのだ・・・あの恐るべき日、惨劇の最中でさえも僕は沈着さを失うことはなかったのだが、周りの人々はそれを無関心、いわば絶望から生じる平静ではないと誤解したかもしれない・・・もし僕がこの種の感情に圧倒されるままになっていたら、どの椅子も、どの部屋も、また、部屋で目につく何ひとつとして刺し貫くような悲しみを惹き起こさないものはないのだから、僕はこのような弱さに負けてしまわぬよう努めねばならないのだ—これが真の感情の欠如でないことを僕は願う。

I found her this morning calm and serene, far very very far from an indecent forgetful serenity; she has a most affectionate and tender concern for what has happened...even on the dreadful day and in the midst of the terrible scene I preserved a tranquillity, which bystanders may have construed into indifference, a tranquillity not of despair...if I give in to this way of feeling, there is not a chair, a room, an object in our rooms, that will not awaken the keenest griefs, I must rise above such weaknesses.—I hope this was not want of true feeling. (Letter 10; To S. T. Coleridge)

さらには、先の手紙からたかだか二週間後に、コールリッジの職業選択（彼



は四つの選択肢の間で迷っていた) に関する懸念とメアリーの狂気発生の過程に関する擁護的な分析を記す手紙を書いていることに驚かされる。この頃、ラムはメアリーの処遇—すなわち、彼女を精神病者収容施設での生涯の監禁生活に引き渡すか、あるいはラムが後見人の資格で保護監督を引き受けるか—をめぐって奔走していた時期であり、後者についての記載はおそらくその延長線上にあるとみていいであろう。前者からは、極度の心労を抱えた人からの便りとは思ってもよらない親身さと洞察が立ち現れてきて、ラムの人間の成長ぶりに目を見張らなばかりである—

親愛なる友よ、僕はきみが人生計画<sup>6</sup>においてこっちの希望からあっちの希望へとうろと方向を変えてどこへも落ち着こうとしないのを見て、心の底から悲しく思う。きみを見舞っているこの状況は（儘ならぬこの世、とみるならば）複数の事態が同時に発生してどうにも避けることのできない運命のいたずらとみるべきか。むしろ、不具合の原因はきみ自身の心にあるのではないかと僕は心配するのだが。きみは幸運の与える素晴らしい計画書を手にするや否や机の上に投げ出してしまふ、そして、いくつもの名案が鬼火のように、きみをあっちへこっちへと引きづり回すのだ。

My dearest friend, I grieve from my very soul to observe you in your plans of life veering about from this hope to the other, and settling no where. Is it an untoward fatality (speaking humanly) that does this for you, a stubborn irresistible concurrence of events? or lies the fault, as I fear it does, in your own mind? You seem to be taking up splendid schemes of fortune only to lay them down again, and your fortunes are an ignis fatuus that has been conducting you.... (*Ibid.*)

次に、コールリッジからの身体的不具合を訴える手紙に対するラムの反応を検討したい。ラム宛の手紙自体は残っていないが、同じ時期の Joseph Cottle 宛および Thomas Poole 宛の手紙<sup>7</sup>の記載がヒントになる。どちらも、極度の体調不良を訴えた上で、非常識なほど大量の阿片チンキを服用したことを記す。さらに後者には、家の中を気が狂ったように数時間裸で走り回ったことを記述する鮮明な描写が付け加えられている。そして、身体的な不調の背後には精神的な原因が示唆されているが、具体的説明は見当たらない。ラムの返事から推測しても、ラム宛の手紙も同様の内容であつたらしく、具体的には把握していない様子が見て取れる。したがって、同情はするものの、これといった対

処法は提案されてはいない。私にとってラムの返信で興味深いのは手紙の後半で、同情とは別レベルで、親友から内心の包み隠しのない告白を受けることの価値について述べている件である。

僕はルソーの『告白録』を好むのと同様に、また同じ理由で、きみの打明け話を好むのだ。同じ率直さ、同じく心を開くこと、同じく心の最も奥まった、繊細な感情を開示すること、そして、これらの事柄を考えると、僕はコールリッジのような人物にとって友人・聴罪司、兄弟・聴罪司の地位にふさわしいと評価されたということになるのだから、鼻が高くなる。

I love them as I love the Confessions of Rousseau, and for the same reason: the same frankness, the same openness of heart, the same disclosure of all the most hidden and delicate affections of the mind: they make me proud to be thus esteemed worthy of the place of friend-confessor, brother-confessor, to a man like Coleridge. (Letter 13; To S. T. Coleridge)

ここでもまた、立場の逆転は継続し、友人は不具合を訴えて、ラムは聴いている。Robert Rehder (*Wordsworth and the Beginnings of Modern Poetry*) の言う「語りと聴聞」<sup>8</sup> の概念を借りるならば、ここでラムが強調しているのは親密な個人的関係に基づく「語りと聴聞」であるが、広くラム文学、ロマン主義文学の特質といえるのではないであろうか。

コールリッジ宛の1796年6月10日付の手紙でラムは自作詩のコールリッジによる修正に苦情を申し入れているが、翌97年1月10日付で再び、もはや修正というより改竄といわんばかりの口調で、変更を厳しく禁じる旨前後二度記している。

僕の小さなソネットを前回伝えた通りに一語一句変えずに印刷に回してほしいという僕の希望は、繰り返す必要はないだろう。特に最初のソネットについては一度ならずきみがやったように、「マーリンの杖がくるっと回って」と印刷したいと思っているのではないだろうね？それではまるで不滅のマーリンの器用な後継者マーリン氏がただ今現在健康で機嫌よく生きていて、オックスフォード通りで魔術師の評判高く繁盛しているみたいに聞こえるじゃないか。まぢがいなく、これを読んだ人の半分はそう取るにちがいない。今度こそ、すでにいろんな手紙で僕が結論を出したような文言で出版に回してほしい。

I need not repeat my wishes to have my little sonnets printed verbatim my last way. In particular, I fear lest you should prefer printing my first sonnet, as you have done more than once, “did the wand of Merlin wave”? It looks so like Mr. Merlin, the ingenious successor of the immortal Merlin, now living in good health and spirits, and nourishing in magical reputation in Oxford Street; and on my life, one half who read it would understand it so. Do put 'em forth finally as I have, in various letters, settled it.... (Letter 20; To S. T. Coleridge, 下線は筆者)

ここには半年前の手紙にみられた権威に対する哀願の調子は見られず、むしろ、滑稽に茶化して揶揄しているといっていであらう。もちろん、詩人コールリッジに対する敬意の念に微塵も変わりがないことは同じ手紙の「コールリッジ、きみには叙事詩を書いてもらいたいのだ。叙事詩以下のものでは真の詩的天才の巨大な能力を使い切ることは不可能だ」云々 (Coleridge, I want you to write an Epic poem. Nothing short of it can satisfy the vast capacity of true poetic genius. Having one great End to direct all your poetical faculties to, and on which to lay out your hopes, your ambition, will shew you to what you are equal. By the sacred energies of Milton, by the dainty sweet and soothing phantasies of honeytongued Spenser, I adjure you to attempt the Epic.) から疑いを挟む余地はない。友人の高い詩才に対する揺るぎない信頼を保ちつつも、自作詩については「まず初めに満足させなければならないのは自分自身、次には友人、そして最後は、友人たち間で意見が分かれば彼らの中の多数派だ」(first a man's self is to be pleased, and then his friends,—and, of course the greater number of his friends, if they differ inter se.) (同書簡) と言い切り、しかも、コールリッジに対して宣言するところに、ラムの作家としての独立した姿勢が現れている。

#### 4. メアリーへの愛情とラムの詩論

96年『詩集』で詩人としての一步を踏み出した途端に、メアリーの事件を契機に、同年9月にラムが自ら作家人生を断念しようと決心したことはよく知られた事実である。また、それ以降コールリッジの折々の懇篤な励ましを受

けて、その決意が揺れ動きながらも少しずつ緩んでいったことはその後の書簡から見て取ることができる。ここでは、97年『詩集』に“SONNET VI”として収録されることになるメアリーへのソネットを軸としてラムの詩についての見解を検討することにする。上記ソネットのコールリッジ『詩集』への所収はラムの詩人復帰への道程の重要な要素であり、ラムにとっては二重の意味を持っていた。まず第一に、コールリッジという“Master poet”の脇に自分が位置を占めることは、ラムにとって行動の根本的な動機となるほど意義深いものであった。そして、おそらく「この菩提樹の木陰」を生み出すヒントになったと思われる「サラとその夫サミュエルへの歌」が97年『詩集』への収録を断られたという苦い経験（結果から推測が可能）も手伝って、この詩の採用のためにはコールリッジに売り込みをしなければならぬとラムは感じていたにちがいない。第二には、ドロシーがワーズワスにとって占めていた地位に幾分近い位置をラムにとってメアリーは占めており、人間関係において、そして、文学的インスピレーションの源泉として中心的な存在であった（例えば、「マカリー・エンド」、「焼き豚論」などはメアリーの存在なしでは成立しないことは明らかである）。

1795年制作のこの作品については、ラムはコールリッジに宛てた複数の手紙の中で実質的に3度言及している。1回目は96年5月27日消印の手紙においてごく簡単に触れているのみであるが、振り返って考えれば、この詩に関する重要な2点を含んでいることに気づく。すなわち、この詩の価値は、文学的な観点からの普遍的な値打ちを別として、コールリッジから見て友人の一大危機との結びつきという点で興味深いはずであり、内容の点からみれば一般読者というより呼びかけの対象であるメアリーにとって特に意味のある書き方といえる。添え書きとともにソネット（手紙の版）を読むことで、より一層ラムの意図が理解しやすくなるであろう。

コールリッジ、僕が狂気に陥ったいた期間、今にして思えば僕の一時的な不調の直接的な原因であったもう一人の人とほぼ同じくらい僕の頭はきみの方に向かっていたと言えば、きみに対する僕の敬意のほどを理解してもらえるはずだ。同封するソネットは詩と

してたいした取り柄はないけれども、僕が[狂人]収容所にいる期間中、時折の清明な  
 合間に書いたものと聞けば読んでみる気になるだろう。

Coleridge, it may convince you of my regards for you when I tell you my head ran on you  
 in my madness, as much almost as on another Person, who I am inclined to think was the  
 more immediate cause of my temporary frenzy.

The sonnet I send you has small merit as poetry but you will be curious to read it when I  
 tell you it was written in my prison-house in one of my lucid Intervals.

<p>わが姉に</p> <p>もし僕の口から怒りの言葉が、不機嫌な愚痴が、        不人情にも辛い叱責が漏れたとしても、        それはひとえに病んだ精神の誤ち、理性の        澄んだ井戸、透明な水を曇らす混乱した        思考の誤ちにすぎないのだ。ひとつ、        この僕の詩をささやかな償いとしてほしい、        僕の詩をきみはいつでも真価以上に        褒めてくれ、ひいき目で見て欠点には        気づかない。きみはどんな時でも僕に        最大の愛情を見せて、しばしば、気の滅入る        恋の歌に耳を貸し、いっしょになって        僕の悲しみに涙を流す。そのきみに        負っている莫大な愛に僕は報いていない        メアリー、わが姉、わが友よ。</p>	<p>to my sister</p> <p>If from my lips some angry accents fell,        Peevish complaint, or harsh reproof        unkind,        Twas but the Error of a sickly mind,        And troubled thoughts, clouding the purer        well,        &amp; waters clear, of Reason; &amp; for me,        Let this my verse the poor atonement be,        My verse, which thou to praise: wast ever        inclined        Too highly, &amp; with a partial eye to see        No blemish: thou to me didst ever shew        Fondest affection, &amp; woudst oftimes lend        An ear to the desponding, love sick Lay,        Weeping my sorrows with me, who repay        But ill the mighty debt, of love I owe,        Mary, to thee, my sister &amp; my friend—        (Letter 1; To S. T. Coleridge, ゴシック体は        原文.<sup>9</sup>)</p>
--	---

もちろん、この時には売り込みの意識などあるわけがない。ラムの言葉は、ある作品をもっともよく理解してくれるのは時間的空間的に離れた一般読者ではなく、作者である自分と親しい人たちであるという強い前提に立っているように聞こえる。そして、その他の読者に披露するとしても、友人たちの反応を先に確かめてから、改めて検討するといった様子が窺える。

約半年後の次の手紙では、この詩を含む97年『詩集』収録予定のラムの全作品を姉メアリーに捧げるという考えが披瀝され、その意図も単なる思いつきや気まぐれではないことが説明される。

僕にも自分の数少ない作品に付けようかと考えている献辞みたいなものがあるんだが、きみが賛成するか、採り入れてくれるかどうか聞かせてほしい。僕の詩は姉に捧げたいと思う。びっくりして、喜ぶだろう。気まぐれに見えると思うかい？このことは姉には話していないから、取りやめるのも簡単なんだが、一緒に住んでいたり、あるいは現在の僕たちの場合のように、しょっちゅう顔を合わせている人々の間では愛情に新鮮さが失くなりがちだ、お互いに愛情の表現には無関心になるからね、だからこそ、ときには驚きという策略のお世話にもならなければならないのだ。

I have another sort of dedication in my head for my few things, which I want to know if you approve of, and can insert. I mean to inscribe them to my sister. It will be unexpected, and it will give her pleasure; or do you think it will look whimsical at all? As I have not spoke to her about it, I can easily reject the idea. But there is a monotony in the affections, which people living together or, as we do now, very frequently seeing each other, are apt to give in to: a sort of indifference in the expression of kindness for each other, which demands that we should sometimes call to our aid the trickery of surprise. (Letter 14; To S. T. Coleridge, 下線は筆者)

続いて三つ目の資料である97年1月10日消印の手紙を検討する。内容は採用未定の自作品(“To Mary”)についての批評であり、弁明であるが、つまるところ、『詩集』第2版の準備も進んでいることと考えているラムの売り込み攻勢とっていいであろう。

僕の最後のソネットの後半6行の調子が詩的でないことは分かっている。あんな地味な詩をきみの本にもぐりこませてくれと言うのは無茶だと思う。ただ、あの6行の趣旨は僕の気持ちにぴったり当てはまるし、メアリーに対する僕の愛情の永続的な証しを積み残しておきたいのだ。調子に獨創性はく、盛られた情緒にも万人に共通する自然な感情以外特別なものもない、詩などと名付けるに値する何もものもないことは認めるが、でもこの作品は目の前において眺めていたいと思うものを僕の心に差し出してくれる。確かに後半6行は前半と結びつきが悪い。きみの判断で割愛してくれてもいい—たかがソネット、しかも最低級の作品とはいえ、僕の頭のような不精で働きのない頭にとって話すべき話題になってくれるのだから、何という宝だ。

I am aware of the unpoetical cast of the 6 last lines of my last sonnet, and think myself unwarranted in smuggling so tame a thing into the book; only the sentiments of those 6 lines are thoroughly congenial to me in my state of mind, and I wish to accumulate perpetuating tokens of my affection to poor Mary; that it has no originality in its cast, nor anything in the feelings, but what is common and natural to thousands, nor aught properly called poetry, I see; still it will tend to keep present to my mind a view of things which I ought to indulge. These 6 lines, too, have not, to a reader, a connectedness with the foregoing. Omit it, if you like.—What a treasure it is to my poor indolent and unemployed mind, thus to lay hold on a subject to talk about, tho' 'tis but a sonnet and that of the lowest order. (Letter 20; To S. T. Coleridge, 下線は筆者)

すでに見た同じ書簡に現れる「不滅のマーリンの器用な後継者」云々の批判を考慮に入れると、このソネットに関する表向きの最終的な自己評価である「最低級の作品」という言葉を真に受けるのは困難である。むしろ、戦略的に迂回的な表現を用いているとみるのが妥当であろう。したがって、引用文の下線を施した3箇所については、コールリッジの評価基準に対するラムの抗議と結論付けることに大きな無理はないであろう。特に「調子に独創性はない」という弁明は、半ばは、知的な一捻りを要求する癖のあるコールリッジの美学原理の押し付けへの牽制とも取れる一幾分話が逸れるが、直截的な批判に加えて、このような迂回的な表現にも二人の詩人の間に発生した文学原理をめぐる暗闘を読み取ることは、遙か後1817年にコールリッジが *Biographia Literaria* (『文学的自叙伝』) においてワーズワス批評を行ったことの予型的行為ととらえることを可能にするかもしれない。

ここで簡単にワーズワスによる1800年版『リリカル・バラッズ』の「序文」—いうまでもなく、実質的にロマン主義の宣言書と呼ばれるものであるが—の中心的な概念の表現とみなせる文を拾い上げて、ラムとワーズワスが共有していると思われる考えを検討したい。ワーズワスは「私がこれらの詩において自分自身に課した目的は庶民の人生の出来事を、派手さを抑えて真実そのままに、その中に人間本性の基本的法則を辿ることによって、興味深いものとすることである」(The principal object then which I proposed to myself in these Poems was to make the incidents of common life interesting by tracing in them,

truly though not ostentatiously, the primary laws of our nature) (1, x) と堂々と公言するが、ラムの遠慮がちで卑下した調子で述べられた「万人に共通する自然な感情」とは意図とトーンに大きな開きがあるものの、結果的には酷似する趣旨を見出すことができる。また、「大切な対象と結び付けられた感情」(feelings connected with important subjects) は「愛情の永続的な証し」と、さらに、「並以上に統一力をもつ感受性に恵まれた人が長期間、じっくりと考えた」(being possessed of more than usual organic sensibility [he] had also thought long and deeply) (1, xiv) は「目の前において眺めていたいと思うもの」と強力にはいえないが、相似た観念を共通にもつとみてよいのではないだろうか。詩の創作原理に関してラムとワーズワスが近いアプローチをすることについての詳細な説明は現在の私の手に余る大きな問題であるので他日を期したいが、ここではロマン主義草創の時期に二人の詩人が古典主義に相対する態度を深い意味で体得していたことが簡便ながら確認できたと思う。

##### 5. コールリッジとの仲違いとサウジーの登場

ラムのコールリッジとの関係はネザー・ストーウィー訪問を頂点として98年に入ってから1月28日付の手紙の後、共通の友人 Charles Lloyd をめぐって急速に悪化し、同年98年5月下旬から6月上旬の送付と推定されるよく知られた「神学命題質疑」(“Theses Quaedam Theologicae”)<sup>10</sup>を含むこの上ない皮肉に満ちた絶縁状に類する手紙<sup>11</sup>を送って以来、約1年半音信不通となる。これまでのコールリッジとの書簡と比較すればこの手紙の痛烈さはラムの隠れた一面を露呈するという意味で興味深いものであるが、今回は新たにラム書簡集の名宛人として登場する Robert Southey とのやり取り(98年11月3日付)に着目したい。コールリッジ相手の批評ディスカッションにおいては果敢な戦いを挑んでいるとはいえ、時折一歩下がった遠慮がちな物言いが見受けられたのに対して、サウジー相手の場合ははるかに思い切りがよく、自信に満ち、時にずけずけした印象さえ与えるのである。一詩の批評においてこれほど断固とした改良案はコールリッジに対してなされることはなかった。



そして、きっぱりと、僕は結末をこんな風にしてほしいと思う・・・このほうが、現状のより良き世界への陳腐な言及より強い印象を残すだろう・・・そしてきみは田舎の結婚式の模様を追加することで作品をうんと深みのあるものにすることができるだろう・・・それから、これらの描写は一切おしまいにして、彼女のただ今の運命に戻る。僕にはこれ以上の名案はない。

And, decidedly, I would have you end it somehow thus...which would leave a stronger impression...than the present common-place reference to a better world...And you might also a good deal enrich the piece with a picture of a country wedding...then dropping all this, recur to her present lot. I do not know that I can suggest anything else....

(Letter 37; To Robert Southey, 下線は筆者)

そして、極めつけはサウジーの寄稿によるとラムが推測した—Marrs はサウジーと断定 (1, 143)—発行直後の『リリカル・バラッズ』中の“Ancient Mariner”の批評についてのラムの厳しいコメントである。

もし『クリティカル・レビュー』の書評を書いたのがきみであれば、「エンシェント・マリナー」への賛辞が少なすぎたのは残念だ—きみは「オランダ風の試み」云々と幾分洒落てはいるとはいえ酷薄な呼び名を付けているが、とんでもない、僕なら真正英国風の試み、しかも、ドイツ式崇高の王座奪取に成功した試みと言うだろう。きみは大して意味のない奇跡の詰まった一節を引き合いに出しているくせに、奇跡を見事に描いて奇跡的に素晴らしい 50 もの箇所を見逃しているじゃないか。僕はこれほど深く心に染みるものの哀れに接したことがない—

「愛の泉がわたしの心から迸り出て  
わたしは思わず彼らのために神の加護を祈った—」

この詩行は苦痛を経て崇高な歓喜へと、僕を導いたのだ。

If you wrote that review in “Crit. Rev.,” I am sorry you are so sparing of praise to the “Ancient Mariner;” —so far from calling it, as you do, with some wit, but more severity, “A Dutch Attempt,” &c., I call it a right English attempt, and a successful one, to dethrone German sublimity. You have selected a passage fertile in unmeaning miracles, but have passed by fifty passages as miraculous as the miracles they celebrate. I never so deeply felt the pathetic as in that part,

“A spring of love gush'd from my heart,  
And I bless'd them unaware—”

It stung me into high pleasure through sufferings....

(Letter 38; To Southey, 下線は筆者)

このように、すでに絶交状態となっているコールリッジの作品にあくまでもフェアに接していることが見て取れる。そして、文面からはコールリッジに対する場合とは相当に異なった態度が見て取れるが、いうまでもなく原因はラムの批評力の向上というより、相対する人物の能力差にあるとみるべきであろう。とはいえ、これほど伸び伸びとして自信に満ちた物言いがラムの口から発せられたことはかつてなく、今後の人生態度、創作に変化が生じる可能性を感じさせる一文ということができる。<sup>12</sup>

\* この論文は「チャールズ・ラム—人間的、文学的独り立ちの過程」と題してイギリス・ロマン派学会第43回全国大会（2017年10月21日、専修大学）において発表した論考に基づいている。

(注)

- 1 Winifred F. Courtney. *Young Charles Lamb 1775-1802*. New York, London and Hong Kong: New York University Press, 1982.
- 2 書簡情報を含め、ラムの書簡引用文は基本的に次の版による。Charles Lamb and Mary Lamb. *The Works of Charles and Mary Lamb*. Ed. E. V. Lucas, 7 vols. London: Methuen & Co. Ltd. 1903-5.
- 3 E. V. Lucas. *The Life of Charles Lamb*. 2 vols. London: Methuen & Co. Ltd. 1905.
- 4 Abraham Cowley. *Select Works of Mr. A. Cowley in Two Volumes*. Ed. R. Hurd. London: Printed for T. Cadell, 1772. 2nd ed. I, 114-5. Ebook.
- 5 12番目の僕のエフュージョンにおいて、できるならば、僕は自分の書いた文章にお目にかかりたかったのだ、確かに君の「あなたの妖精の住処にあるバラの花を敷きつめた寝台」云々という見事な詩行とは比べものにならないことはわかっている。僕は僕のソネットが好きなのだ、なぜなら、それらは時々の僕自身の感情を映したイメージとなっているからだ。たとえば13番目では、「何と理性が揺れたことか」云々はよい詩行ではあるが、僕にとってはすべてがだいなしなのだ、だって、僕はそれが君の作り事であって、事実打ちつける荒い波が僕を休息へと揺さぶることはなかったと知っているわけだから。前[12番目]の

ソネットと同じ苦情が当てはまらないことは認めるけれども、それでも、僕には自分自身の感情が好ましくもあり、愛しい思い出なのだ。時折、ため息やら涙やらに誘われることはあるけれども。「済んだことをあれこれと考え」で言うことになるのだが、いいかコル、頼むから僕の雌子羊を見逃してくれ。そして、叙事詩の場合であれば他人ものを6行借用しても盗人とは呼ばれまいが（僕だったら黙って500行借りるとしても異存はないよ）、ただソネットの場合—これは個人的な詩だから—僕は「救いの一節を友達に頼む」ような真似をするつもりはない。

...In my 12th Effusion I had rather have seen what I wrote myself, tho' they bear no comparison with your exquisite lines "On rose-leaf'd beds amid your faery bowers," &c.—love my sonnets because they are the reflected images of my own feelings at different times. To instance, in the 13th "How reason reel'd," &c.—are good lines but must spoil the whole with ME who know it is only a fiction of yours and that the rude dashings did in fact NOT ROCK me to REPOSE, I grant the same objection applies not to the former sonnet, but still I love my own feelings. They are dear to memory, tho' they now and then wake a sigh or a tear. "Thinking on divers things foredone," I charge you, Col., spare my ewe lambs, and tho' a Gentleman may borrow six lines in an epic poem (I should have no objection to borrow 500 and without acknowledging) still in a Sonnet—a personal poem—I do not "ask my friend the aiding verse." (Letter 3; To S. T. Coleridge)

- 6 「人生計画」とは、Lucas の説明によれば、*Morning Chronicle* 誌の共同編集者になること、Evans 夫人の子供の家庭教師、Derby に学校設立、Nether Stowey に落ち着いて農業と文学で食べていくこと、を指す。(The Works of Charles and Mary Lamb. Vol. 6, 49.)
- 7 S. T. Coleridge. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Earl Leslie Griggs. 6 vols. Oxford: OUP, 1956-71. I, 248-50.
- 8 Rehder はヨーロッパの歴史を俯瞰して、宗教的な内省に始まり告白へと向かう動きが文学においては、例えばペトルルカの場合は自己の外界への投影という形をとって『新生』を、ルソーの場合は隠し立てのない伝記的『告白録』を生み出したこと、さらに英文学においてはワーズワスが<詩的伝記／伝記的詩>である『序曲』という後世の文学に影響を与える作品を残したと記し、ロマン主義の本質を<自己内観と告白>とみる。Robert Rehder. *Wordsworth and the Beginnings of Modern Poetry*. N. J., Totowa: Barnes & Noble Books, 1981. London: Croom Helm, 1981. Especially, chapters 1 and 2.
- 9 ラム作品中、この詩のみは次の版による。Charles and Mary Anne Lamb. *The Letters of Charles and Mary Anne Lamb*. Ed. Edwin W. Marris, Jr., 3 vols. Ithaca and London:

Cornell University Press, 1975. Vol. 1, 4.

10 THESES QUAEDAM THEOLOGICAE (神学命題質疑)

- |  |   |
|--|---|
| <p>1. Whether God loves a lying Angel better than a true Man?</p> <p>2. Whether the Archangel Uriel could affirm an untruth? and if he could whether he would?</p> <p>3. Whether Honesty be an angelic virtue? or not rather to be reckoned among those qualities which the Schoolmen term 'Virtutes minus splendide et terrae et hominis participes' ?</p> <p>4. Whether the higher order of Seraphim Illuminati ever sneer?</p> <p>5. Whether pure intelligences can love?</p> <p>6. Whether the Seraphim Ardentes do not manifest their virtues by the way of vision and theory? and whether practice be not a sub-celestial and merely human virtue?</p> <p>7. Whether the Vision Beatific be anything more or less than a perpetual representment to each individual Angel of his own present attainments and future capabilities, somehow in the manner of mortal looking-glasses, reflecting a perpetual complacency and self-satisfaction?</p> <p>8 and last. Whether an immortal and amenable soul may not come to be damned at last, and the man never suspect it beforehand?</p> <p>(Letter 33: To S. T. Coleridge)</p> | <p>1. 嘘つきの天使とまことの人間では神はどちらをよりよく愛するであろうか?</p> <p>2. 大天使ユリエルに嘘を肯定することが可能であろうか? もし可能であるとして、肯定しようとするであろうか?</p> <p>3. 正直は天使の美德であろうか? それとも、むしろ、学者たちが「[?] 一段劣った地上的、人間的属性としての美質」と呼ぶもののひとつであろうか?</p> <p>4. 高位の [?] 啓明熾天使は軽蔑の笑いを浮かべることがあるであろうか?</p> <p>5. 純粹知性に愛することは可能であろうか?</p> <p>6. [?] 光輝熾天使は幻視と黙想を利用して彼らの美德を啓示することはしないであろうか? そして、実践は地上的、人間的美德にすぎないのであるか?</p> <p>7. 「至福直感」とは個々の天使にとって自身の現在到達地点及び未来潜在力の永劫の表示にすぎない、いいかえると、人の世の鏡に映った己の姿と同じく、永劫のひとりよがり、自己満足なのであるか?</p> <p>8 最終. 不滅の従順な魂が最後に地獄に落ちることはないか、そして人は前もってそれに気づくことはないであろうか?</p> |
|--|---|

11 Letter 33 に含まれる「神学命題質疑」の添状

Learned Sir, my Friend,

Presuming on our long habits of friendship and emboldened further by your late liberal permission to avail myself of your correspondence, in case I want any

学問高きわが友、

長き交友の誼よしみに乗じて、さらには、小生の知識に欠けたる折は貴兄に書簡をもって尋ねるべし—知識に関する限り、頼るべき百科事典かレディーズ・マガジンが手元にな

knowledge, (which I intend to do when I have no Encyclopaedia or Lady's Magazine at hand to refer to in any matter of science,) I now submit to your enquiries the above Theological Propositions, to be by you defended, or oppugned, or both, in the Schools of Germany, whither I am told you are departing, to the utter dissatisfaction of your native Devonshire and regret of universal England; but to my own individual consolation if thro' the channel of your wished return, Learned Sir, my Friend, may be transmitted to this our Island, from those famous Theological Wits of Leipsic and Gottingen, any rays of illumination, in vain to be derived from the home growth of our English Halls and Colleges. Finally, wishing, Learned Sir, that you may see Schiller and swing in a wood (vide Poems) and sit upon a Tun, and eat fat hams of Westphalia,

I remain,  
Your friend and docile Pupil to instruct  
CHARLES LAMB.  
1798.

S. T. Coleridge

い時にはそうさせていただくことになるであろう—という近来の寛大なる許しに意を強くして、小生この度は上に記した「神学命題」を貴兄に送付し、貴兄の故郷デヴォンシャーからの遺憾の声や英国全土の失望の声をも物ともせず勇んで出向くというドイツの学府において、其れ等の命題が是とあるいは否とされているか、もしくは是否ともに弁ぜられているか教えを請いたく思う。小生ひとりの慰めを言わば、学問高きわが友よ、わが英国の講堂や学寮から発せられる自国産の光が望み得ぬとすれば、ライプチヒ、ゲチンゲン知られたる神学博士たちから啓明の光がわが島国に貴兄の帰国を通じてもたらされるも可なり。末尾ながら、学問高き貴兄がシラーとの面会を果たし、森の中で風に吹かれ（詩集より借用す）、大酒樽の上に座し、厚切りのヴェストファーレン特産ハムを食されんことを祈る。

心変わらぬ  
友にして、教えを乞う従順なる弟子  
チャールズ・ラム  
1798年

S. T. コールリッジ殿

- 12 次に載せる作品はコールリッジとの別れが発生する数ヶ月前、同人宛の手紙に含まれ、タイトルが示すように家庭内悲劇の1年後に書かれた無韻詩で“*All Familiar Faces*”を思わせる調子と内容もち、非常に厳しい人生態度を感じさせる作品である。特に、初期ソネット群と比較する時、この作品からは悲劇的事件が彼の人生観にいかにも甚大な影響と覚悟をもたらしたかが、鮮明に理解できるであろう。そして、おそらくは、二つを比較して家庭内悲劇がただ単にコールリッジとの別離以上のインパクトをもっていたというより、むしろ後者を冷静に、距離をもって受け止めさせる素地を作っていたのではないか。このような素地があってこそ、師とも仰いで来た親友詩人に対する、一見唐突にみえるあのよう

激烈で辛辣な反応が生じたとみるべきではないであろうか。

WRITTEN A YEAR AFTER THE EVENTS (事件の1年後に書かれた詩)

(contained in Letter 31: To S. T. Coleridge[About September 20, 1797.] )

Alas! how am I chang'd! Where be the tears,  
The sobs, and forc'd suspensions of the  
breath,

And all the dull desertions of the heart,  
With which I hung o'er my dead mother's  
corse?

Where be the blest subsidings of the storm  
5

Within, the sweet resignedness of hope  
Drawn heavenward, and strength of filial love  
In which I bow'd me to my father's will?

My God, and my Redeemer! keep not thou  
My soul in brute and sensual thanklessness  
10

Seal'd up; oblivious ever of that dear grace,  
And health restor'd to my long-loved friend,  
Long-lov'd, and worthy known. Thou didst not  
leave

Her soul in death! O leave not now, my Lord,  
Thy servants in far worse, in spiritual death!  
15

And darkness blacker than those feared  
shadows

Of the valley all must tread. Lend us thy  
balms,

Thou dear Physician of the sin-sick soul,  
And heal our cleansed bosoms of the wounds  
With which the world has pierc'd us thro' and  
thro' . 20

Give us new flesh, new birth. Elect of heav'n  
May we become; in thine election sure

ああ！僕はなんと変わったことか！あの涙  
はどこへ？

あの啜り泣きは、無理やり押し殺した息は、  
死んだ母の棺に覆いかぶさり感じた  
麻痺した心の空虚は何処へ行ったのだ？

漸く訪れた嵐の鎮まりに浮かんだ 5

心の安堵は？来世に託すと決めた  
甘き希望の光は？父の言葉に首を垂れた  
子にふさわしき強き愛はどこに？

わが神、わが救い主よ！わが魂を  
人にあるまじき忘恩の檻に 10

閉じ込めること勿れ—もったいなき恵みを、  
長き愛の友、長き愛が真心を証した友に  
回復された健康の恵みを忘れ果てて、汝は

わが友の魂を死の淵から救い出した！わが  
主よ、

汝のしもべをなお悪しき棄霊の淵に、 15  
万人の通る冥土の恐ろしき谷よりなお暗き闇  
に

捨て置くこと勿れ！癒しの薬を与え給え、  
汝、罪に病む魂の愛しき医師よ、

穢土で繰り返し突き刺されたわれらの  
幾多の胸の傷を洗い清め、癒し給え、 20

われらに新しき肉体を、新しき誕生を与え、  
天の選ばれし者となし給え。汝の選びし数か  
ら

外されることなく、唯一つの目標に繋ぎ止め  
給え—

われらの魂の救済に！

愛しき友、きみと僕は  
いつの日か、子故の嬉しき見憶えととも

Contain'd, and to one purpose stedfast drawn,  
Our soul's salvation!

Thou, and I, dear friend,  
With filial recognition sweet, shall know 25  
One day the face of our dear mother in  
heaven;  
And her remember'd looks of love shall greet  
With looks of answering love; her placid  
smiles

Meet with a smile as placid, and her hand  
With drops of fondness wet, nor fear repulse.  
30

Be witness for me, Lord, I do not ask  
Those days of vanity to return again  
(Nor fitting me to ask, nor thee to give),  
Vain loves and wanderings with a fair-hair'd  
maid,  
Child of the dust as I am, who so long 35  
My captive heart steep'd in idolatry  
And creature-loves. Forgive me, O my Maker!  
If in a mood of grief I sin almost  
In sometimes brooding on the days long past,  
And from the grave of time wishing them  
back, 40

Days of a mother's fondness to her child,  
Her little one.

O where be now those sports,  
And infant play-games? where the joyous  
troops  
Of children, and the haunts I did so love?  
O my companions, O ye loved names 45  
Of friend or playmate dear; gone are ye now;  
Gone diverse ways; to honour and credit  
some,  
And some, I fear, to ignominy and shame!

に, 25

天におわす母上の顔にまみえるにちがいない。  
母の優しさに溢れる目には、同じく優しさの  
溢れる目で僕たちは答え、母の静かな微笑み  
には  
静かな微笑みを返し、そして、差し出された  
手は  
拒絶を恐れずに、愛の涙で濡れた手で握り返  
す。 30

主よ、私の証人になり給え—私は、あの  
虚飾の日々を二度と求めまい、  
(私が望み、あなたが許す—ともにあるべか  
らず)  
うたかたの愛も、美しき髪乙女とのそぞろ  
歩きも。

塵の子にして、愚かにも、長きに渡り 35  
わが囚われの心を偶像崇拜と被造物への  
愛に浸しけり。許し給え、おお、わが造り主！  
悲しみの気分襲われて、遙か昔の遠い日々  
に  
折々思いを馳せ、時の墓場から母親の子への  
一小さな愛子への—優しさを偲ばせる  
日々を 40

取り戻そうともがきながら、半ば道から  
逸れそうになったとしても。

ああ、かつての遊びは今やいずこに、  
子ども時代の遊戯はどこへ？はしやぎ回る子  
どもたちの  
群れは？大切にしていた彼方此方の遊び場は  
どこへ？

ああ僕の仲間は、ああ愛しい名前の数々  
よ— 45

友だち、そして、遊び仲間—きみたちはいな  
くなった—  
散り散りになった、あるものは名誉と信望の

I only am left, with unavailing grief  
 To mourn one parent dead, and see one live  
 50  
 Of all life's joys bereft and desolate:  
 Am left with a few friends, and one, above  
 The rest, found faithful in a length of years,  
 Contented as I may, to bear me on  
 To the not unpeaceful evening of a day 55  
 Made black by morning storms!

September, 1797.

道へと、  
 またあるものは、哀れ悪評と恥辱の道へ  
 と！  
 僕に残されたものは、片親の死を嘆きつつ、  
 また、もう片親が人生の喜びを奪われて空  
 虚に 50  
 耐える様を眺めつつ、湧き上がる詮なき嘆  
 きのみ。  
 わずかな友人と、とりわけ、長の年月  
 僕のもとを立ち去らなかつたきみの手で  
 一朝の嵐にかき曇った一日も暮れなずみ、  
 不穏ならぬ夕べへと落ちつくよう  
 に— 55  
 従容として人生の晩年に導かれんことを！

1797年9月

(余談ながら、すでにみた97年1月10日消印のソネット“To Mary”における記述全般と比較すると、8ヶ月後に書かれた上記無韻詩中の‘Thou didst not leave/ Her soul in death’ (13-4)の2行は、前者で表現しきれなかったラムの思いを十全に伝えているという点からこの期間に生じた詩人の精神的・文学的成長を垣間見させるばかりでなく、彼の前者に対する愛着の深さの理由をも感じ取れることを可能にすると思われる。)

(奈良県立医科大学 准教授)